



図1 美術鑑賞スキルの構造

表1 作品要素における各カテゴリーの定義

<p><b>主 題</b></p>	<p>主題には、絵に現れている題材や、絵の中で扱われているテーマが含まれる。熟達した鑑賞者にとって絵の主題は、題材だけに限定されず、より抽象的で主観性の高いものになる。例えば、『クリスティーナの世界』では、「横たわる女性」、「後ろを向いているクリスティーナ」、「小さな家」、「広い草原」などの題材そのものから、「クリスティーナの生活する世界」や「クリスティーナの心の世界」などのテーマに関するものまで幅がある。</p> <p>また、表現されたテーマは、表現された感情よりも抽象的で主観性の高いものと考えられる。例えば「この作品を見て感じたことは、現実とは違う別世界のような感覚を抱いたということです」など。</p> <p>さらに、絵のテーマにかかわる時代背景や作家の意図も含まれる。例えば、絵のテーマにかかわる作家の意図を示した例としては、「この作品で作家が表したかったことは、途方もないものとそこに立ちすくむ人間ということだと考えます」などがあげられる。</p>
<p><b>表 現 性</b></p>	<p>表現性は、主に心情の表現であり、具体的には作品に示される感情、作家が表現する感情や鑑賞者が感じ取る感情を意味する。例えば、『クリスティーナの世界』では、「寂しいような悲しいような思い」、「クリスティーナの哀愁、希望」などの記述は、表現性のカテゴリーに属す。</p> <p>また、作家の気持ち、制作の動機、鑑賞者が感じ取ることや想像することなどが考えられる。例えば、「絵を鑑賞する時に、その絵を観て自分が何を感じるかはとても大切なことだと思います」などは、鑑賞者が感じ取る表現性を判断した例である。作家の気持ちを示す例としては「隣人であり、親しい友人である彼女から、作者自身が感じる印象をそのまま描いたのだと思います」などがあげられる。</p> <p>一方、鑑賞文で「表現」という語句を動詞として用いても、必ずしも感情表現とは限らない。例えば、「明るい色で表現され」という記述は、造形要素のカテゴリーに入れることが適切である。</p>
<p><b>造 形 要 素</b></p>	<p>造形要素は、絵を具体化していく基本的な要素を意味し、物理的な媒体も含む。造形要素には、色や線、形、陰影、明暗、遠近感（空間）、構図（バランス、対比など）、絵の大きさなどが含まれる。例えば、『クリスティーナの世界』では、「女性のポーズ」、「後ろ向きの姿勢」などは、形にかかわるものである。また、「女性の少し前に延ばしかけた左腕」、「髪の毛のなびいている様子」、「力のこもった細い腕や指先」などの記述は、身体よりも形や構図などの造形要素に関心が向けられており、造形要素のカテゴリーに入る。その他に、技法についての記述も含む。</p>
<p><b>ス タ イ ル</b></p>	<p>スタイルは、広い意味での作家の独特な作風、絵の描き方（写實的、抽象的）、形式にかかわること、美術史の分類や創作のジャンルなどを含む。例えば、作家の独特な作風の例としては、「この作品を見て私は、なぜワイエスは、見る人によっていろいろな想像ができ、本当の意味がわからないような描き方をしたのかという問いを持ちました」などがあげられる。</p>

表2-1 鑑賞行為における各カテゴリーの定義

	定義	レベル1	レベル2	レベル3
連想	<p>連想は、きわめて個人的な思いつきや考えのひらめきによる行為である。そして、連想は、平凡な思いを超えて、意外性や新鮮さによって面白さを感じさせる。また、連想は、発達に応じて個人的な出来事や記憶から、美的な問題に関連する事件や美術史にかかわることに変化する。</p>	<p>絵を見て、個人の出来事や記憶を思い出し、連想する。個人の好みや意見に強くかかわるものである。それ以上のことを述べない限り、他者が同様の連想をすることはなく、同意されない。平凡な連想にとどまることが多い。</p>	<p>「～のように」「～みたい」という言い方がよく使われ、ある程度理解できるものであり、他者にも興味を感じさせる。また、個人の思いつきにもかかわらず、ある程度の意外性や新鮮さによって、面白さを自分や他者を感じさせる。例えば、「この作品を見て連想したことは、自分の故郷です」など。</p>	<p>絵を見て個人の美的経験や記憶を思い出し連想する。根拠がなくとも、他の美的な主題や表現などを思いつきで連想する。個人の美的経験に起因する連想は、あくまで自由な発想によるものである。例えば、「風の音にのって誰かの声が聞こえたのかもしれない」は、主題を連想する例である。個人的な連想がさらに普遍的なものに展開する場合は、さまざまなスキルが関与しており、高度な鑑賞行為といえる。</p>
観察	<p>絵の外観について推測を交えずに客観的に記述する行為である。例えば、「～が描かれている」など。良い観察は、物事の真の姿を正確によく見ることであり、発達に応じて観察がいつそう具体的になり、自分の観察行為を意識し、整理するようになる。</p>	<p>絵に現れている物事をでたらめに記述する。個別のことをあげるにとどまっており、詳しい観察は述べられない。例えば、「女の人、家、草原が描かれている」など。</p>	<p>絵に現れている出来事や様子を具体的に記述する。主語や述語の中に、絵の場面が記される。例えば、「この作品で描かれている場面は、広い草原の中に女性が横たわっているという情景です」は、主題を観察している。また、色や光線や陰や線などの観察もあげられる。</p>	<p>絵の場面を詳しく観察して記す。例えば、主語に詳しく形容する語句が使われたり、絵の場面を総合的に観察し、状況を詳しく説明する記述が付加されている場合など。例えば、「この作品で描かれている場面は、草原で横たわっているクリスティーナが向こうの家を見つめているという情景です」は、主題を観察する例である。</p> <p>また、自分の観察を感知しながら、何を、どのように、どうして見ているのか、と自己分析し、その観察を記す場合や、物事を分類し、整理し、作品を具体的に記す場合。</p>

表2-2 鑑賞行為における各カテゴリーの定義

	定義	レベル1	レベル2	レベル3
感想	<p>感想は、直感的に感じ取る行為であり、多くの場合、個人の想いや意見を示す。個人の記憶や推測などが混在し、論理的に整理されたものではないが、作品と直接向き合った経験から生ずるものといえる。</p> <p>感想は、連想と重なる部分があり、厳密に限定できない部分がある。連想は、非常に個人的な発想、物語のような想い、奇抜な考えであるが、感想は、奇想天外ではなく、人々の日常的な経験に基づいた意見であり、一般に考えられる範囲内のものである。</p>	<p>素朴な感想、平凡な意見を述べる。一般的な意見、単に個人的な意見を特に意識せず、感じるままを述べる。「～と思う」「～を感じる」などの言い方が使われる。</p>	<p>自分が経験した感想や感じ方の原因を知っている。なぜ自分がそう思うのかを知っており、その原因をほのめかす。これは、一種のメタ認知である。例えば、『クリスティーナの世界』では、「この絵を初めて目にした時、非常に写実的な描写に驚いた」「そして、これは実際にある風景に違いないと思い込んでいた」「しかし、絵をじっくり見るうちに、果たして現実の風景なのかという疑問が湧いてきた」など。</p>	<p>作品について感じ取ったことは、作品と鑑賞者の両方の感情の出会いを重んじた作用ととらえられる。例えば、「画面の中の女性は、一人寂しく画面の中に佇んでいて、見る人を寂しい感じにさせます」など。</p> <p>さらに意図的に美のテーマが示唆されたり、仮説が提示される。例えば、「そこに一人の女性が意味深げに座っていることから、何かドラマ性を感じる」など。</p> <p>作品の資料や芸術理論などと結びつけたり、専門用語を使って、個人的意見が示される。例えば、「作品の解説例を読んでみて、クリスティーナがどんな人物だったのか？～驚きました」など。また、「今日は『クリスティーナの世界』について知ることができてよかったです」など、前向きな感想が提示された場合。</p>
分析	<p>分析は、画面に現れているものを要素に分解し、関連性を明らかにする行為である。関連性の記述には「～から、～だから、～ため、～より、～の、～に対して、～にもかかわらず、比較してみると～」などの接続詞が使われる。分析は、正確に絵の外観を述べる観察とは異なり、各要素の関連性を明確にして記すものである。また、分析は、ソフトな言い方で自分の感想を述べるのではなく、ある程度の論理性が示されるものである。</p>	<p>画面の細部を識別し、それらの関連性に興味を示すが、はっきり述べない。観察のレベル3に類似するが、絵の外観を客観的に述べる観察に対して、絵の要素にかかわる関連性を明確に示す材料として、細部の特徴を述べる。例えば、「描かれたものをもう少しくわしく見てみると、例えば人物は明るい色で表現され、背景は暗い色で表現されています」など。</p>	<p>理由をあげたり、限定した言い方によって、物事の間接性を述べる。効果的な分析には至らないが、疑問や留保する言い方によって、関連性を記述する。例えば、「この作品を見て私は、なぜ風景は荒涼としているのに、暖かみを感じるのかという問いをもちました」や「草原は茶系の色で描かれていることから秋であろうと想像でき」の例は、一要素（茶系の色）をあげた単純な因果関係の分析であるため、レベル2と判断される。</p>	<p>さまざまな造形要素や表現方法の間に、どのようなかわりがあるのかや、相互にどのように影響し合うのかなど、画面に現れる物事の間接性を論理的に述べる。各要素の複雑な関連性が理解され、論理性が高く、説得力のある分析である。例えば、「描かれたものをもう少し詳しくみてみると、落ち着いた色調と繊細な描写により、戻りたくても戻れない遠くの家を思いを馳せる女性の悲しい心情を表しています」は、表現性を分析した例である。</p>

表2-3 鑑賞行為における各カテゴリーの定義

	定義	レベル1	レベル2	レベル3
解 釈	<p>解釈は、作品に対する理解に基づいて、作品の意味について述べる行為である。解釈は芸術家の意図と必ずしも一致する必要はない。解釈は、分析のように作品の外観の要素に注目するのではなく、作品の意味、テーマ、内容について、観点や考え、理解を示す。「～と考えました」「～と思えるから」「ワイエスは～と言いたい」などと記述される。</p>	<p>鑑賞者が漠然と思ったことや、芸術家の意図を強く意識して推測したもの。解釈のレベル1は、主観性が強いものであるため、感想に類似するが、あらゆる側面から湧いた個人的感想に対して、解釈は特に作品の意味や各要素の意味についての主観的な考えである。例えば、「でも何か深い意味のありそうな絵だなあ～と思いました」など。</p>	<p>さまざまな情報と知識に基づいて、ある観点や考えを提示し、ある程度筋が通った解釈になったもの。根拠が必ずしも明確に示されていなくとも、作品の意味や表現に対して、ある程度理解されるものになっている。例えば、「クリスティーナという女性の心の中の風景」という解釈の後に、「作者ワイエスは、彼女の生きる孤独に満ちた『世界』を象徴的に表現したのではないだろうか」と記述される例など。</p>	<p>説得力ある理由や根拠を明確に示している解釈。特に美術史などの理論や、他の分野の見解を応用して、解釈の根拠を示すものである。例えば、「クリスティーナの生活する世界」という解釈の根拠に、「なぜなら、クリスティーナは小児麻痺のために足が不自由となったがために、行動が制限され、どこにでも自分の思うがままに行けるというわけではないからです」と、作品解説や資料からの理解をふまえて記述している例など。</p>
判 断	<p>判断は、作品に対する個人の反応や価値観を示す行為であるが、ある観点に基づいて判断する方がより客観的と考えられる。どの程度の客観性を持つか、判断に根拠があるか、妥当な判断かによって、評価のレベルを定める。</p>	<p>感情的な判断。特定の理由がなく、恣意的な判断である。例えば、「私は、これが好きだ。良い絵だ。」これ以上、何も述べていないものなど。</p>	<p>具体的な観点に基づく判断。ただし、その観点は必ずしも説得力あるものではなく、一般的な感想によるものが多い。例えば、「絵を見て、自分なりのストーリーを考えてみるのは楽しいことなので、そんな点からも、興味深い絵だと思いました」など。また、ソフトな言い方による場合が多い。例えば、「～の絵だからとてもおもしろいと思いました」「このような違和感がこの作品の魅力の一つであると考えています」など。</p>	<p>各要素の関連性を分析したり、意味を解釈し、明確な観点を述べた上で価値判断するもの。個人的な観点かどうかにかかわらず、明確な観点に基づいた判断は、鑑賞活動の中で非常に重要な役割をもつと考えられる。自分の判断以外にも他者の判断を意識しながら判断することが多い。例えば、「この作品が優れているのは、女性が後ろ向きで座っているという点だと考えます」「なぜなら、女性の顔が見えないというところが、鑑賞者に女性の心情や顔を自由に想像させることができるからです」の例は、判断の観点が明確に説明されている。</p>